essais こころみ New　2026年1月

2026年1月1日（木）日の出一時間前、そして初日の出

2026年1月3日（土）　晴

恒例、はやめに蝋梅をめでる

おだやかに新年が明けた。年末は今週だったけど、ずっと前のように感じる。お天気に恵まれ、よい年越しだった。

大そうじらしきことを30日の午前中までに済ませ、晴れて風もないので、大阪城梅林をめざして自転車で出かけた。

京都もそうらしいけど、以前のことからすると人が少ない。中国からの渡航者が減ったからかと。

観光客は天守閣の方へ流れていく。今の時期に梅林へいく人は地元も人ぐらい。それもほんの数人。

まずは蝋梅。毎年確認している木がある。策の手前に植わっているから、間近でみられる。

一つ、二つ、咲き始めていた。鼻をちかづける。あの独特の艶っぽい匂いがして、過去の同じような場面を思い出す。

「恒例」があるというのはいい。直感的にそう思うのだけど、何がいいんだろう。ただまったく個人的な場合に限るかもしれない。

個人的な「恒例」がある、それの何がいいか。ああいうこともある、こういうこともある。頭に漠然をいくつか浮かぶ。

それこれまとめると、つまりは、「自分を生きている」を意識することなく、カラダの奥底、あるいは隅々で感じるからでは？

と、こんなことをつらつら考えてもよさそうな、穏やか正月三が日。

2026年1月４日（日）夜明け前の西の空に今年最初の満月

2026年1月5日（月）小寒　曇

先週から昨日まで、年末年始ずっと穏やかに晴れた。今日からほとんどが仕事始め、2026年が動きだす。新年早々世界情勢はまた混沌としてきた。さてどんな一年になるか。

― おさらい独習　「六十四卦」―　16.予

「よ」、解説に「予には３つの意味がある。たのしむ、おこたる、あらかじめ」。付けられたタイトルが「歓楽の功罪」。

「歓楽」とはさて。あらためて辞書で調べると、基本的には「喜び楽しむこと」ながら、次の２つがあった。

「物質的な欲望を満足させて楽しい思いをすること」、「ぜいたくに暮らすこと」。

だから解説に、「〈歓楽〉にうつつを抜かせば〈油断〉して思わぬ失敗をする。〈あらかじめ〉警戒してゆかねばならない」。

同時に、「これまでの不遇は今日までの予備段階であった、準備完了、油断せず歓びの境遇を切り開いてゆくがよい」。

さてこの「予」の卦を現代の身近な事象にあてると…、「昇進」あるいは「抜擢」？　抜擢かな？

（事象）　抜擢。過去の仕事ぶりと人柄が評価され、新事業の責任者に抜擢される。適材適所の人員構成でのぞみ、成果をだす

（心得）　「報奨制度をととのえる。メンバーの努力と結果に報いて、さらにはげまし、仕組みを全社に働きかける」

（構え、パノラマ）
一、驕慢になる。上役から目をかけられ、驕慢の心がめばえる。言動に得意さを表し、やがて評価をさげる

二、使命を一貫して果たす。怠け、享楽を退けてれば目的を果たす

三、虎の威をかりて得意になる。上役にへつらい、権威の後ろ盾でものをいわす。そのままなら生涯後悔することになる

四、仲間とともに大成功に歓喜する。想定をこえた結果に畏れ多い気持ちになることもない、当然の流れ

五、疑心暗鬼になる。目下に実力者が現れ、立場が危うくなる可能性はあっても、われを忘れなければ道は絶たれない

六、理性を失う。われを忘れ、歓楽に埋没してしまう。もし悔いあらためることができれば、不運は免れる

以上、「予」のおさらい。「抜擢」にもいろいろあるけど、本書では組織の事象のようなので、こうした。

そういえば、会社員時代にちょっとした「抜擢」を経験していた。いま思い出した。

われながら、ちょっと得意になっていた気がする。あのまま在職していたら、驕慢の成れの果てになっていたかもしれない。

その後に独立への伏線をたどることになる。まったくそのつもりで辞めたわけではないけど、結果的に、辞めてよかった。

2026年1月7日（水）　曇・晴

昨日の鳥取の地震。大阪でもしばらく横揺れ、とっさに東北の時を思い出した。余震が続いているが、このままおさまりますように。

― おさらい独習　「六十四卦」―　17.随

「ずい」、したがうこと。解説に「〈したがう〉とは、主体性を失って流れにまかせることではない」。

そして、「何に随うか、これは主体の決断にかかっている。随っていく対象をしっかり見定めねばならぬ」。

さて、この「髄」をどう捉えるか。解説と原文の卦辞、「大象」を総合的に考えて、

（事象）　仕事以外の世界で人々と交わる。社会的地位、肩書にとらわれず、交流して、信望を集めることになる

（心得）　「柔軟性を養う。仕事人間一辺倒ではなく、高度な平凡性、社会性をそなえるよう努める」」

（構え、パノラマ）
一、今までの仕事に変化が生じる。それでも初志を貫き、住む世界を広げるなら成功する

二、付き合う相手を見極める。目先の利益に誘う人になびけば、厳しいが真に自分のための言動をとる人には見抜かれ、見放される

三、悪縁を絶ち、善縁をつむぐ。「われ先に」精神の人から遠ざかり、善い人と自然体で交流し、信頼関係構築につとめる

四、立場を逸脱する。地位ある人と親しいことでその威をかりて社会的にふるまい、信頼を失う。はやめに改めれば、無難

五、善い人をつらぬく。生まれも育ちも良く、そのまま善い人としていきる

六、意志を伝えつづける。善い人であろうと自他ともに働きかける

以上、「随」のおさらい。こう書き終えて、これには二つの意味が重なっているような。

卦辞と「大象」の段階では、中井久夫先生が書いていた「高度な平凡性」を維持する意義をおもった。

仕事でいろいろと困難な意思決定をしなければならない立場にいて、その精度を高める一つの方策として、多様な世界をもつ。

それが視野を広げ、見識を深め、判断力を磨く。そんな風にとらえ

また、休息している時に活発になる脳の領域、「デフォルトモードネットワーク」のこともおもった。

仕事以外の世界をもつことが、「休息」にあたり、心の安定がひいては閃きの可能性をうみ、意思決定に磨きをかけるかと。

でも六爻をみていくと、善い人につくか、そうでにかを問うているような。いや、それもつながっているともいえるけど…。

なんだかんだと考えさせてくれます。

2026年1月9日（金） 曇・晴

早朝は雲っていた。徐々に晴れてきて、夜にかけて晴天の予報。気温は低いけど風はよわい。三連休、月曜は荒れそう。

― おさらい独習 「六十四卦」― 18.蠱

「こ」、皿に盛った食物に虫がわいていること。解説に「泰平が続けば内部に腐敗と混乱が進行する。まことに多事多難」。

しかし、「窮すれば通ず、矛盾が深ければ深いほど逆に根本的解決が可能となる。革新、新生のとき」。

原文には改革に臨む際の貴重なポイントが示されている。

「今や改革のとき、新時代の創造にあたっては、ここに至った経過と今後の展開を、慎重に考慮してかからねばならぬ」。

この卦はイメージしやすい。官僚主義的になった大企業、ワンマン経営者の企業風土、など等。

親の創業した会社が行き詰まり、子が意を決して社長に就任し、再起をはかるケースもよくある。

ところでこの「蠱」を『イクザガミ』の新聞広告で見た。ネトフリの配信で世界的なヒットになっているドラマ。

広告によると、「蠱毒」というデスゲームを描く物語りとか。原作者は『易経』からヒントを得た？

（事象）　世代交代、事業継承。過去を検証し、未来の展望を明確に描き、やるべきことを率先して実行すれば危難を克服できる

（心得）　「社員たちを守る。改革にあたって、社員たちの不安を払拭し、会社に希望がもてるような方策を講じる」

（構え、パノラマ）
一、先代の「負の遺産」を処理する。創業精神は尊重して、改革を実践すれば、リスクは伴うが、乗り切る

二、先代の社外活動にメスをいれる。先代の社会的な体裁が保てるよう施す

三、処理を徹底する。内心やりすぎの気持ちがあっても、対外的に示しがつく

四、先代の苦境をただ傍観する。危機がしのびよる

五、改革を果たす。先代の創業精神を引継ぎつつ、会社の企業文化を刷新する

六、自立して新しい代を創る。先代の何もかも引き継がず、一から自分の代をつくる

以上、「蠱」のおさらい。最後の六番目の原文は、「王侯につかず、野にいて一身を高潔に保つ。その志は模範とするに足る」。

これをどう解釈すればいいか、考えが浅くて、あまりしっくりこないが仕方ない。それでもそこそこ頭の体操になっている、このおさらい。

2026年1月11日（日）厳寒、強風の日に天満橋から北浜散歩

2026年1月12日（月）祝日、前日に続き厳しい寒さ、でも春をさがしに大阪梅林

2026年1月13日（火）　曇・晴

早朝はまずまず晴れていたが、午前中雨の予報。11日、12日は寒かった。前日が暖かったから堪えた。でも散歩に出かけて冷たい風をあびた。頭もカラダもすこし清められる気になった。

― おさらい独習　「六十四卦」―　19.臨

「りん」、解説に「上から下のものを見下ろすこと。転じて、上から支配と保護を及ぼすことである（君臨）」。

支配といっても、「上下親しみあう状態を表す」。

運気は、「しだいに隆盛に向かうとき」だけど、「この場合は、短期決戦、急速に盛んになって、たちまち衰える傾向がある」。

ついては、「時機を見るに敏なるを要する」。

また、「熱中するかと思えば、すぐに忘れてしまう人間類型を示すものでもある」。

だから、「よほど心してかからないと、一生悔いを残すことになりかねない」。

原文はごく簡潔、上下親しみあって大いに栄える。でも「物盛んなれば必ず衰う」。

この後に、「八月、陽気衰退のときに至れば、凶に転ずる」。この八月はたぶん中秋のこと。

先の「短期決戦」からすると、「冬至」にとりかかったことが春に陽の目をみて、夏に成果が出て、その後急降下…？。

熱中するけど飽きやすい面もある上司、部下たちを鼓舞して「一緒にいい夢をみよう」と事に臨む、ただし成果は単年でおわる？

さてこの「臨」を現代にどうおきかえて考えるか、浮かんだのはチームプレー、そこで以下。

（事象）　チームリーダー。メンバーとよく協調・協働して高い成果をあげるが、それがいつまでも続くことはない

（心得）　「下の者の責任を引き受ける。上にたつ者として下に責任をおしつけず、リーダーの功を発揮する」

（構え、パノラマ）
一、　上下ともに理念を共有して事に臨む。使命を貫けば、成功の道

二、盲従しない。上下ともによく協調、協働して進むも、上層部の理に適わないことを見過ごさない

三、慢心におちいる。緊張感のないまま事に臨んでもうまくいくはずがない。自ら気づいて改めれば、挽回できる

四、誠実に徹す。誠実に事に臨んで、前進

五、英知を養う。英知を養うにつとめ、事に臨む姿にオーラ

六、情に厚く、誠実に事に臨む。賢人にならう姿勢が吉をよぶ

以上、「臨」のおさらい。あらためて、「物盛んなれば必ず衰う」、「窮すれば通ず」を肝に銘じる。

2026年1月15日（木）　曇

朝は冷え込んだが、日中は１２℃の予報。日の出時間も12日に反転して早くなり始めた。春の陽気もすぐそこ。

― おさらい独習　「六十四卦」―　20.観

「かん」、訳者によって付けられたタイトルは「ものの見方について」。解説に、「凝視すること」。

つまり、「ただ漠然と見るのではなく、よくよく見つめる、奥底まで見抜くことである」。

なぜそれが」必要か。「君子道が衰え、利欲がせめぎあってまさに秩序崩壊のとき」。

こういう時こそ、「静思して、現状の奥底まで見抜かなければならない」。それができれば、「徳となって人々を感化することができる」。

そしてこの「観」は、「行動よりも静思の段階であるから、指導的な地位の人、教育者、学者、研究者にとってよい卦」。

原文の冒頭、「観ること。天子上にあり、柔和にして謙虚、中正の徳をもって天下を観るのである」。

さてそこで、先に六爻をおさらいした。すると、事象は「専門家」か、と。

（事象）　専門家。謙虚さ、穏やかさ、公正さをもって依頼者の抱える問題をよく観察して、真因を見極め、解消へと導く

（心得）　「周辺事情や状況もよく観察する。問題を表面的にとらえず、広く深く観察して、真因をつきとめる」

（構え、パノラマ）
一、観察が幼稚。専門家として至らない

二、視野の狭い観察。専門家としては恥ずべき

三、自分を厳しく観察して進退を決める。そうでなければ道を失う

四、依頼先の理念にそった成長像を構想する。その実現プランを提案して採用され、トップに優遇される

五、自分を省みる。専門家として人の役に立るほどの知識と人格をそなえているかを問い、そう努めて、道が続く

六、依頼先の状況変化を見逃さない。結果に満足せず、気を緩めず、フォローする

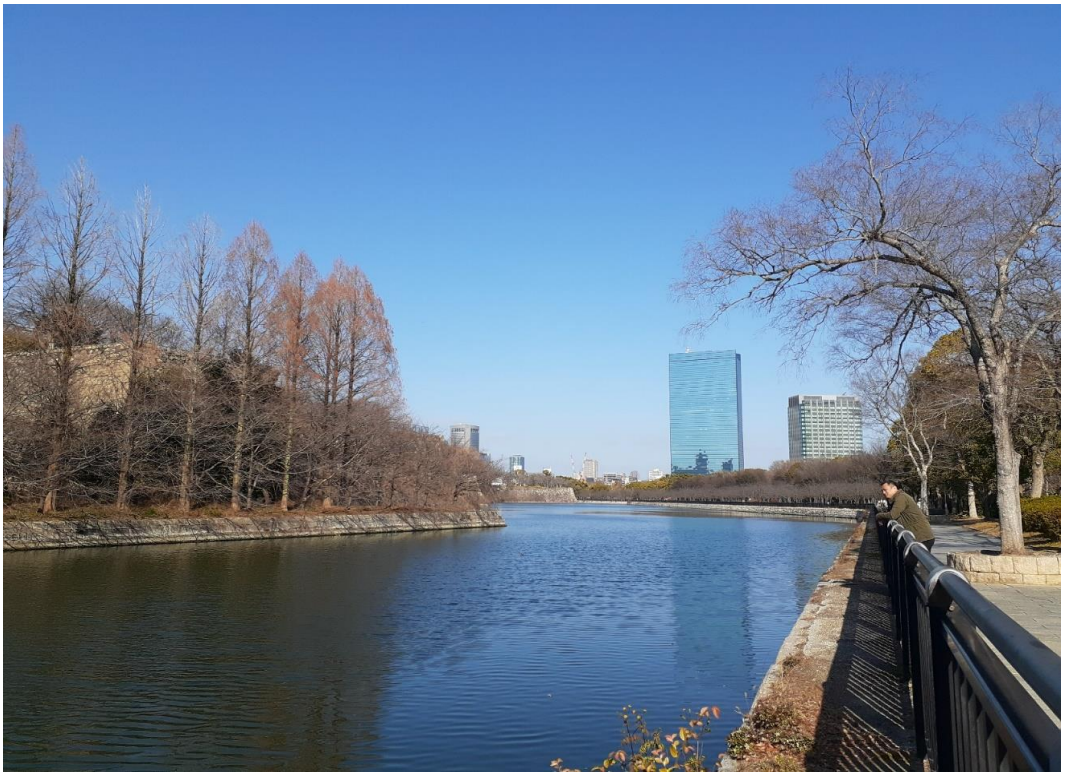
以上、「観」のおさらい。書きながら、いま音読している『精神医学的面接』の教えとつながる感じ。

誰かが言っていた、「本当に偉い人は今も昔、古今東西、同じようなことを言っている」。

2026年1月16日（金）　まるで春の陽気、ビルの谷間の小さな公園に桜咲く？！

夕方、帰りに中之島バランを通って帰宅

2026年1月18日（日）　引きつづき春の陽気、大阪城公園梅林へ自転車散歩



2026年1月19日（月）　晴れ

先週後半から春の陽気、１６日（金）に堺筋本町のビル谷間の小さな公園で桜が咲いているのをみた。見間違っていないと思う、他の人も写真におさめていた。今週半ばからまた寒さ。

― おさらい独習　「六十四卦」―　21.噬こう

「ぜいこう」、「こう」の字は口ヘンに上に「去」その下に「皿」。辞典によれば、意味は「おしゃべりなさま、笑う声」とか。

「噬」の方は、「かむ、かみつく。くう、食いつく」の意味だそう。この卦につけられたタイトルは「連帯を阻むもの」。

解説には、「噬こうとは、噛み合わせること。卦の形は、上下の歯の間に物があって、噛みあうことを妨げている状態」。

だから、「邪魔物を噛み砕けば、上下が合する」。またこの卦は上に火（太陽）、下に雷（活動）、よって、「盛んな活動力を象徴」。

だから、「旺盛な生活力を積極性で、障害物をはねとばして進んでゆけば、大きな成果があることを示している」。

しかし、その障害物は「剛であり、甘く考えていると思わぬ抵抗に遭うことになる。

よって、「中途半端な妥協や姑息な手段を弄することなく、全力を傾けて真正面からぶつかって行くことが肝心である」。

原文の結びに、「和を妨げるものには懲罰を加えるよい」。

さてそこで、この「噬こう」を現代におきかえて考えて、以下。

（事象）　自己保身に終始する人の存在。この問題を解消すれば全体の力が結集され、大いに伸びる

（心得）　「人事労務管理の仕組みを整える。服務規律や賞罰の基準や条件を明確にする」

（構え、パノラマ）
一、公然と注意する。周囲からの目を戒めに自戒をうながす

二、言い訳を断じる。老獪な相手に臆せず、核心をつく

三、異動を命ずる。法的対抗をちらつかせ抵抗されるが、実行することはない

四、過去の虚偽、不正をみつける。対処は困難をきたすが、未来に希望がもてるようになる

五、毅然と対処する。公明正大に実行し、悪弊を断ち切る

六、解雇を通告する。非は本人にあり、やむを得ない

以上、「噬こう」のおさらい。お正月休みの時の番宣でおもしろそうだったなら、『おコメの女』の1話、2話をみた。

六つの爻を書きながら、その２話の舞台となった老舗和菓子店の「番頭」が頭に浮かんだ。

ちなみに、日本のドラマはほとんど見たことがないが、「大地真央」のキャラがおもしろくなりそうで、続けてみる気になっている。

2026年1月22日（木）　曇

きびしい寒さ、大雪警報の出ている地域も多い。北海道や東北の状況がニュース映像で流れた。雪の降り方が尋常じゃない。生活の日常、想像を絶する。

― おさらい独習　「六十四卦」―　22.賁

「ひ」、　解説よれば、「賁とは、飾り、装飾のこと。美しい装飾は人の心を喜ばせる」。

卦の形は、「夕映えが山の草木を美しくいろどっていることを示す。しかしそれは没落寸前の輝きをも暗示する」。

個人にあてはめれば、「外面ばかり飾って、内面的な深みを失っていまうのである」。

原文の結びには、「時の変化を察知し、文化によって天下を教化する」。現代では、「教化」は否定的にとらえられていたような…。

辞書には、「きょうか。人を教え導き、また、道徳的、思想的な影響を与えて望ましい方向に進ませること」。

この意味からも個人や集団を自分たちの都合よくコントロールしようというニュアンスがある。そこでAIに実例を尋ねてみた。

３つ挙がった。全体主義国家での思想統制、カルト宗教による信者の操作、植民地支配下での文化的教化。

そうそう、これらが頭の隅にあった、「教化」には。それはさておき「賁」を身近におきかえて考えみると…

（事象）　時流と自流を読む。見聞きするものから、その隠された意味や将来などを推察する、先の手を考える

（心得）　「思考、熟考する時間をもつ。日常業務にこなしながらも、未来のための時間をつくる」

（構え、パノラマ）
一、スローメディアにふれる。インフルエンサーなどの言説にただ追随するのではなく、公正、丁寧にまとめられた情報や知識をとりいれる

二、先達の知恵にならう。自分、自社のあるべき姿とその実践方法のヒントをさがす

三、構想する。時流を3つのパターンで想定し、それにそって将来像のシナリオを描く

四、バランスをはかる。３つのシナリオの上で、あらためて全体像を描いてみる

五、態勢をととのえる。新しい取り組みへ土台を固める

六、展望がひらける。自分、自社の進むべき道が明らかになり、霧がはれる

以上、「賁」のおさらい。「読む」は、個人的には大事な言葉。2024年度のテーマとも関わっている。

『仕事の履歴』ページにあるとおり、2024年度のテーマは、『ふみこんで考える』。

そのために、「微かな変化、様子を〈読む〉」をタスクの柱にしたのだった。そのココロ…

「記号化されたもののその意味や内容を理解する、外面をみてその隠された意味や将来などを推察する、先の手を考える」。

それまでもそうしてきたように思う。でももっと意識してしようと自分に言い聞かせた。もちろん、今も。

2026年1月27日（火）　曇・晴

昨夜は「上弦の月」、10時半ごろだったか、西の空に浮かんでいた。満月は２月２日、３日は節分、そして４日立春。

― おさらい独習　「六十四卦」―　23.剥

「はく」、　?ぎ落す、削り減らすこと。解説に、「高くそびえる山が浸食作用によって平地に化してしまう様子を表す」。

そして、「自覚症状のない重病、失脚をねらう部下、放蕩による破産など、衰運の極である」。

誡めに、「みだりに力まず、じっと冬の時代の終わるまで待つこと。冬来たりなば春遠からじ」。

原文の方でも、「小人の勢いが強大になっている時、無理に事を行えば害を招く」。

だから、「時勢に順応し、節度を守って止まるべき。時に利不利をわきまえて行動するのが天行の法則」。

これからのことから頭に浮かんだのは、最近目にする「新・重商主義」。商を重んじて絶対君主制を維持しようとする。

さてそれをミクロでとらえて…、「ワンマン経営」？

（事象）　ワンマン経営。トップの独断が過ぎても取り巻きは「太鼓持ち」ばかり、いまは無に徹して、時を待つ

（心得）　「部下を守るために自分を守る。部下たちがf利益を被らないように努力する」

（構え、パノラマ）
一、現場の声が届かない。正しい状況判断ができなくなる

二、秩序がみだれる。現場のやる気が低下し、指示や命令に抵抗感がうまれる

三、弊害およぶ。部下や自分にも理不尽な処遇をうけそうになる

四、破綻寸前。組織が硬直化し、変化に柔軟に対応できずにきた当然の結果

五、女性を登用する。各部署から人選して女性を中心をした改革プロジェクトを組織する

六、トップ交代。現場からの叩き上げ、努力家で人望も厚い人物がトップとなり、陣容を一新する

以上、「剥」のおさらい。書きながら、今のアメリカの状態がどうしても浮かぶ。

「王様」を増長させる人ばかりで、いつかの日経新聞でもそんな風に解説していた。

ウクライナの先行きしだいでは、世界は本当に「小人の勢いが強大」となって、「しのびよる危機」に近づいていきそうで気になる。

2026年1月29日（木）　曇・晴

昨日と同じ最高８℃の気温、風があまりないので厳しい寒さというほどでもない。ただ明日あさってはそうはいかなそう。体調気をつけよ

― おさらい独習　「六十四卦」―　24.復

「ふく」、　復興、破滅の後に建設が始まる。解説に、「復とは冬至を示す。徐々に春が立ち復（かえ）るのだ」。

そして、「長かった苦しみももう一息だ。しかし焦っていますぐ飛び出すようなことをしてはいけない」。

なぜなら、「あわてて芽を出そうとすれば、晩雷に遇ってたちまちくじかれる」。

だから、「じっくり将来の大計を樹（た）てるべきときである」。

原文では、「時に順応して動けば、出かけるにも帰ってくるにも障害はない。」。

「大象」は、「聖王はその卦象をみて一陽来復の冬至の日には、（すべてはいったん停止して）、陽気盛大になる時を待ったのである」。

さて、これを現代におきかえ、身近なところで考えてみると…

（事象）　第二創業。業態転換をともなう経営革新に臨む。そのためのプロジェクトを編成し率いる

（心得）　「計画立案に注力する。内部・外部の環境分析を徹底する」

（構え、パノラマ）
一、希望的観測に陥り、それに気づく。シビアさをとり戻し、正しい判断材料を得る

二、理念に合った方向性を見出す。そのまま進めて可

三、軽率な言動でミスをする。ほどなく気づいて正せば事なきを得る

四、バランスをとる。異論反論を排除せず、勘案して計画を進める

五、孤軍奮闘する。まわりの抵抗は小さくないが、しだいに協調、協働する

六、方向を見失う。目先に利益に惑わされ、理念から遠ざかり、停滞は10年続く

以上、「復」のおさらい。ここに付けられたタイトルが『一陽来復』だった。「冬来たりなば春遠からじ」。

冬至から新年の「計」を樹てはじめる。例年11月になるとみなさんに言ってきたことに通じる。

中井久夫先生のいう、「太古からのリズムがひそんでいる可能性」をわたしたち現代人のなかにみる。